

室生犀星の短歌（その一）

星 野 晃 一

一、はじめに

室生犀星の文学というと、まず詩が中心ジャンルとして扱われる。ついで小説、そして俳句となり、短歌はその存在すら一般的には知られていないようである。犀星文学における習作期は、おおざっぱに言って明治時代と考えられるが、その明治時代に習作の俳句・詩と並行して、短歌も作られている。

当時においても、犀星の短歌は、俳句・詩の主に対して従の位置にあり、比較すれば軽く見られていたようである。^(注1) また、自身もそれ程熱を入れて歌作していたのではないらしいことは、明治期の北陸新聞・北国新聞への掲載状況からみてもわかる。おそらく、表棹影・尾山篤二郎らの影響による歌作にすぎなかったであろう。

しかし、だからといって軽視したままですませるものではあるまい。創作主体形成期における文学活動の一つとして、短歌は当然注目されねばならない要素をもっているはずだ。

これまで、藤田福夫・室生朝子両氏がらが、犀星短歌を探し求め、求め得た作品を発表されている。^(注2) それらは誠に貴重な資料である。しかし、残念ながら、悪条件のもとでの仕事であったのであろう、完全な形で記されているとはいいがたい。記録にやや誤りがある。これは『室生犀星文学年譜』（明治書院 昭57）作成時から気になっていたとである。基礎資料として、できるだけ正確なものにしておかなければならない、そう思っていたのである。そこで、今回、特に明治期の短歌に限って、初出誌紙にあたって確認し、現在までに明らかにされている七十一首を、「二、明治期の犀星短歌」に示すことにした。室生朝子氏も趣旨に賛同、協力して下さった。

なお、その際歌の下に番号を記したが、その番号に「//」を付したものは、藤田福夫・室生朝子両氏が、それぞれ注2に示した雑誌に発表された作品であり、「/」を付したものは、室生朝子編の「犀星の若き日の歌」だけに記されている作品である。また、番号だけの作品は、『室生犀星文学年譜』作成の際発見された作品である。

先に発表された記録の誤りは、あえて示してはいない。犀星短歌

を、できるだけ正確な形で記録することが、本稿の意図だからである。なお、字体は新字体に直してある。

さらに、本稿でのもう一つの目的は、「三、『晚秋』十二首について」に示した私見の提示である。新保千代子氏の『室生犀星—ききがき抄』（角川書店 昭37）以来、犀星の代作とされているが、ことによるとそうではないのかもしれない、という疑問を示した。

二、明治期の犀星短歌

あけ雲に瑠璃鳥なきぬ御岳の湖心に白き蓮ひらく時
白梅のうつらうつらとまぼろしの影を逐ひつゝ春の夜ふけぬ

1" 2"

鳥居赤き社頭の春の落日を羊むれぬ影長きかな

3"

色白のわらべ少女の飯事をねたしげに見る腹の黒さよ
冬の雨磧の石の一つづつうるひてぬれぬ茜の色に

4" 5"

御母は不具ゆ多人にすねし身を憂ひ給ひぬ神社の家

6"

われ恋し巨人の髪の一すじは胸の緒琴の絃となるかな
蛇つかふ喇叭たるげに蘇鉄さへ古町淋しき昼さがりかな

7" 8"

面映ゆし君にまみゆる一瞬は濃紅の花の日に輝る思ひ

9"

雨ふる日蝶々どもは露傘の下より下に戯むれてぬ

10"

いとうすきわが影うつるあら壁に虫はうなりぬ物怖づ夜なり

11"

ふるさとや姉をならひて菓子箱に蚕飼するなる妹おもふ

12"

初夏の曇れる空に煙噴いて草に灰しぬ浅間神山

13'

花ぐもり町のはこりのわが村にけむりのごとくも草はうて来ぬ

14'

わが胸に木乃伊となりし影溶けて病はいえぬはつ夏のまど

15'

ふるさとや姉を真似して菓子箱に蚕飼するなるいもうと

(12)

雨思ふ日蝶々どもは路傘のしたよりしたにゆきゝしてぬ

(10)

青すだれ 人まつ友を すき見して 惑にありぬ 夕顔の垣

16"

目を閉づれば 玉虫あまた 美しくしき羽着て 我の胸さがし来ぬ

17"

悪念は百合にしがらむ毒草の蔓としのびて君を捉へぬ

18"

一筋の雨をたよりて天上の星のまどみの常楽を見む

19"

静かなる君がけはひよ桔梗の白きに雨のそぼふる窓に

20"

いと小さき美鳥となりてうるはしき声せば君は来ますと思ふ

21'

そのおもひ 早瀬の月の影の如 白がねなして 砕け消ぬべし

22'

ひとすじの雨の糸繰り天上の星のまどあの常葉を見む

(19)

われを見るさかしき眸よかくまでに心を得んと悶えてあるや

偽はらず媚びず嗤はずたゞ黙したまに泪す水の性かな

君といふ磁に吸はるべきくろがねのこころとしりつ尚もしたしむ

女らにあさましさまに終の日をしらざるごとくわれに依り生く

熱の香は百人にゆくさながらに飽くをもしらず倦む事もなし

よろこばし耳しびけらし超然とのゝしりもせず神に近づく

あゝ想ふ女の胸のひた／＼とたえず浪うつ静なる夜を

強ひぬれば否とも言はでのみてます君もたへざる愁しるかな

君が性たとへばほのほ水を燼く極熱にありわれも同じき

万樹みな芽を吹くごとし君を見る胸の林に春風のふく

眠こそわがあらゆるをつゝみたる繭にしあれよ日輪もなし

あゝくるしねむられぬ眼に万なるかなしみの影みだれあらはれ

君きたるされども逢はず君去ればなつかしこゝろとゞろかに鳴る

大樹きる鋸のねはいやはてのなげきにも似て葉みななるかな

にはとりの卵あまたを葬りてよみがへりたるわが命かな

ひたひたと潮よすごと纒は弛みぬ胸の奇しき舟や

君見すや大風起る山の裏さながら今の狂念に似て

89' 38'

37' 36'

35' 34'

33' 32'

31' 30'

29' 28'

27' 26'

25' 24'

23'

うそぶけば渺茫としても視えぬ山その山の頂に立つ

わが胸にやどるは誰ぞと君は云ふわが手を把るは君にあらざや

かつと照る羅のおん衣に葵花それも憂きかな人にさむる日。

人間に倦めり此の時蒼海に死の舟を漕ぐ吾が魂を見る。

王者こそ吾が敵ならぬ深夜こそはかるによけれ夏の鐘つく。

信者みな白木蓮の浄念に祈れるなかに我おのゝけり

白々と有明雲の冷たさは君がすべてのならはしに似て

わが家はわれを容るべくあたゝかしされども倦みぬ慣れやらぬ君

二十四時つとめに疲れ家にある君に魅せられたゞ生きてあり

夜の国眠らぬ草の花あをくうす闇に咲く淋しさに立つ

驚は山に老いけり君が老知るときいかに悲しかるべき

夏はきぬうらの畑にもろもろの日の光恋ふ熱の草生ふ

55'

54' 53'

52' 51'

50' 49'

48' 47'

46' 45'

44" 43"

42"

41

40"

(43)

水無月となりぬ日ごとに雲見てはさびしう胸にしみ来るおもひ
 彼れ一語われたゞ一語そのみに別れし日あり今また手とる
 いとひくきいと低きねになにか墓をたてよとさゝやくをきく
 葉と葉とのひまに見ゆるれ大空とよろづの星と夜のふかき色
 さらさらと棕櫚の葉鳴りにつたひゆくわが悲しみのいと低きうた
 かきくもる空にひとすぢ残照の消ゆるを君とながめふる丘

*

あゝ暗きかなしき影を水にして蝙蝠とびぬ夕暮の河
 われに憂き冷たき秋の樹々はみなうら葉にそむる悲しみの色
 日曜日あくれば哀し一週を君見ずとしも思ふべければ
 夕風は茨を散らし灰色の蛇の衣吹く七月の野よ

君を見しこの日ばかりは何ものもありてあらざる驕り心よ
 寂としてはしら鏡は一物をうつさず君をのみ待てるかも
 とにかくにけふは昏れけりなりはひに疲れしままの軀よこたへて
 つくつくと生くる愁にあゝ独り死ぬるは淋し君もかく言ふ
 白き鳥雲累れる蒼そらに消ゆとき淋しおん胸に倚る

*

花びらは△かれてゆき日光は蜜の如くに甘く注げり

以上に示した1~71の短歌の、発表年月日、初出誌紙等を次に示す。年月日は略記。また、署名は、「室生犀星」以外のもののみに入れてある。

71"	70'	69'	68'	67'	66'	65'	64'	63'	62'	61'	60'	59'	58'	57'	56'	1"	2"
																明 39・12・19	政教新聞〔北陸新聞〕の前身「文苑」欄「二葉会第二回詠草」中の短歌〔「二葉会」は未詳〕
																明 40・2・3	北陸新聞「文苑」欄「二葉会詠草」中の短歌
																明 40・3・10	北陸新聞「文苑」欄「二葉会詩稿」中の短歌
																明 40・4・19	北国新聞「二葉会詠草」中の短歌
																明 40・4・22	北陸新聞「文苑」欄「二葉会詠草」中の短歌
																明 40・6・7	北国新聞「二葉会詠草」中の短歌
																明 40・7・1	新声 署名「さいせい」尾上柴舟選
																(12)・(10)は、それぞれ12・10の改作。(12)には欠落あり。	
																明 40・7・27	北国新聞「北辰詩社短歌(上)」中の短歌〔北辰詩社〕は尾山篤二郎らとの結社)
																明 40・7・28	北国新聞「北辰詩社短歌(下)」中の短歌
																明 40・8・21	北国新聞「新歌壇」欄〔北辰詩社詠草其他より〕中の短歌
																明 40・8・21	北国新聞「新歌壇」欄〔北辰詩社詠草其他より〕中の短歌

19の短歌の傍線は、新聞掲載時にあったもの。当日の作品には、他の作家のものにも同様の傍線がある。

49'・50'・51'・52'・(43)・53'・54'	明41・6・15 文庫 相馬御風選
45'・46'・47'・48'	歌 署名「犀星」
42" 41	明41・6・3 北陸新聞 「文苑」欄 「北辰詩社詠草」中の短歌
42" 43" 44"	明41・6・1 趣味 窪田空穂選
38" 39" 40"	明41・5・20 北陸新聞 「文苑」欄の短歌
30' 31' 32' 33' 34' 35' 36' 37'	明41・5・1 新声 尾上柴舟選
26"	26"の「さま」の「さ」が印刷不鮮明だが、判読し補う。
24"	24"の「媚びず」の「び」、「泪す」の「す」が印刷不鮮明だが、判読し補う。
23" 24" 25" 26" 27" 28" 29"	明41・3・29 北陸新聞 「文苑」欄 「北辰詩社例会席上吟」中の短歌
(19) 明40・12・1	新声 尾上柴舟選
19"	19"の改作。
22' 明40・9・27	北国新聞 「新歌壇」欄の歌
21' 明40・9・19	北国新聞 「新歌壇」欄 「北辰詩社詠草より」中の短歌

71" 明43・5・4	北国新聞 「四高和歌会詠草」中の短歌 署名「宝生犀星」
55'・56'・57'・58'・59'・60'・61'	明41・7・1 新声 尾上柴舟選か（記名なし）
(43)は、43"の改作。	
62'・63'・64'・65'・66'・67'・68'・69'・70'	明41・8・15 文庫 相馬御風選
明41・9・15	文庫 相馬御風選
△印は、印刷不鮮明で判読不能の文字の箇所。	
三、「晚秋」十二首「しついで」	
次にあげる「晚秋」十二首は、「薬事評論」（東京薬学校内編集部 明43・10・15 78号）に「白楊」という署名で掲載された作品である。	
晩 秋	
1 眼に痛み植物園の赤ダリヤ散るころを又た逢ひにたる人	
2 白楊の散るころも亦別れ来ぬかくて君にもまた別れなむ	
3 濁りたる流しの三味の消えしあとこころしづかに嘆きゆくなり	
4 深き夜のながれの底によどみたるあぶくに似たる悲しみの群	
5 言ふことも言ひ得てははれ黙殺すこの心もちつづく幾日か	

眠りゆく沈みゆくなる気分より快よきなしかくてありなむ
つかれたる顔みな垂れて夕ぐれへはこばれてゆく電車さみしき 6
晩餐のあはき味感をかぞへつゝ販る日頃のつかれし心 7
かへるべき家も無き子は公園のいたきベンチをまたたづねゆく 8
冷やかになきも出でぬる蟬にかこまれながら空をながむる 9
月光の青くふるへる夜の深さこほろぎの雨ふるが如啼く 10
秋や々に枯れたる草に雨の如黄なる光のふれるころかな 11
12

これまで、これらの作品は犀星の代作とされている。しかし、はたしてそうであろうか、という疑問が生じたのである。今回、犀星の短歌のみを集めて再読してみると、その歌いぶりに、犀星とは異質のものがあるような気がしてならないのである。

しかし、歌風が突然変化するということもありうるし、部分的に誰かが手を入れてしまったというようなこともありうるし、また、代作ゆえの質の違いということも考えられるわけだから、代作ではないという確かな証明は、困難ではある。

まず、「晩秋」十二首にかかわりのあるいくつかの事実を示し、その後で疑点を添えるということにする。

1 犀星の「薬事評論」代作に関しては、犀星自身「弄獅子」「泥雀の歌」「私の履歴書」等でふれている。

まず「弄獅子」では、「つまり私は神塚兵衛の詩の代作をする

ことを約束したのである。私はたいてい詩は五六篇書いて神塚に渡したが……」（十九、童女）と書き、「泥雀の歌」では、「吉田三郎の紹介で医学校教授の神崎清二郎に会い、毎月校友会の雑誌に詩を五六枚書き、それで五円づつの稿料を神崎氏から受領することになったが、……」（十、活動写真館）と書いている。「私の履歴書」の中の「風塵」には、「ある薬学雑誌の編輯者に吉田三郎が紹介してくれ、毎月その文芸欄に詩を書くことになったが、時折、散文も書いて月五円支払って貰った」とある。

つまり、「弄獅子」「泥雀の歌」では八詩Vの代作をいい、「私の履歴書」では八詩V八散文Vの代作を行ったといっている。この内容がそのまま事実であるとすれば、「薬事評論」への八短歌Vの代作はなかった、ということになる。

2 古く新保千代子氏は、『室生犀星—ききがき抄』（角川書店 昭37）の中で「晩秋」十二首のうちの八首（先にあげた歌の下に付した番号でいえば1・4・5・7・8・9・11・12の歌）を引き、「巻末短歌はあきらかに犀星の作とおもわれる。——略——『かへるべき家もなき』は作者自身ではないにしても、そこにはなすこともなく浅草公園のかたいベンチに、終日もの言わずぼんやり時を過ごした青年犀星の姿を感ぜずにはいられない」と書き、犀星代作との判断を示している。

3 室生朝子氏は『父犀星の秘密』（毎日新聞社 昭55）の中の「松の花粉」（初出は「新潮」昭47）で、この代作問題に詳しくふれ、

これら短歌を代作としている。「薬事評論」の調査や九十歳の神谷吉兵衛氏（代作を依頼した人物）との面会の記述を通してである。中に、面会の折、句集に収録されていない犀星の句二つを神谷氏が知っていたことを記したところがあり、神谷氏と犀星との接触が、自伝小説でいう△詩▽散文▽だけではなかったことが一応理解できる。つまり、△短歌▽の代作もありえたということである。

4 『室生犀星文学年譜』（明治書院 昭57）では、この短歌は、署名が「白楊」であることに備考でふれ、犀星作という結論を出している。编者として、室生朝子氏はもちろん私も同じ立場をとっている。

5 これまでの年譜で最も詳細な、先にあげた『室生犀星文学年譜』中の第三編「室生犀星年譜」には、次のようにある。「（明治43年）十月頃、吉田三郎の紹介で、東京薬学校の神谷吉兵衛を知る。同校校友会誌「薬事評論」に、四十四年六月まで神谷白楊の名で和歌、俳句、詩を書く。一か月五円の謝礼を受けたと伝えられる。」

以上が、「薬事評論」掲載の短歌に関する主な参考意見である。これらによって、「晩秋」十二首が代作とされてきた過程はよく理解できるとは思われるが、しかし、代作という決定的な証明は、厳密にいえばないのである。新保千代子氏の、「あきらかに犀星の作とおもわれる」

という推定、そして、「かへるべき家もなき…」の歌に「犀星の姿を感ぜずにはいられない」という感想が、出発であった。室生朝子氏の調査によって、他ジャンルの事実は確かめられてはいるが、「晩秋」十二首に関しては、はっきりとした証明はなされていないのである。

次に、「晩秋」十二首が犀星代作ではないかもしれないと疑える根拠を、作品を分析的にみることによって、二つ示しておこう。

まず、表現方法と歌風である。「晩秋」十二首と、明治期の終りの作品十首（62'〜71'）とを比較してみよう。

「文庫」の九首をみる。62'・63'・65'・69'・70'の五首が四句切れであり、64'・68'が二句切れの倒置、67'が四句の中で切れ、66'が、「北国新聞」の71'と同じく二句止めの歌である。いわゆる五七調の歌で、どちらかという調子は重い。その歌いぶりは明治期のすべての短歌にもいえることで、四句切れが圧倒的に多く、二句切れがこれにつき、初期には初句切れもあるが、三句で切れる歌はほんの数首を数えるのみである。

昭和期に入っても、たとえば「改造」（昭2・12・1）には、「夕銅前しまし読まなむ文ありて机によれば落着きにけり」「山家なる軒にうごかぬ白雲をまさしくは見る碓氷ねの上」「荒松の音にづる聴けば山中の道の途絶えつ帰り来にけり」など、いずれも四句で切れており、俳句的な重い歌いぶりは変わらないのである。

これに対して「晩秋」十二首は、無句切れが二つ、三句切れ・三句止めの七五調が七首もあり、まことに流暢な調子である。短歌的な詠

嘆が比較的巧みに表現されて、用語・表現とも練れており、犀星の挑戦的・実験的な思い入れがない。

二つめの根拠は、「晩秋」六番目の歌「眠りゆく沈みゆくなる気分より快よきなしかくてありなむ」の「ありなむ」である。たとえば、先にあげた「夕銅前しまし読まなむ……」の歌にもあるように、また、有名な詩句「何時かまた月のごとき母に逢はなむ」（「良い心」）の表現にあるように、犀星の破格の表現の問題である。犀星は、△連用形十なむ▽であるべきところを△未然形十なむ▽で表現するのが特色である。これが、「晩秋」の短歌「眠りゆく……」ではなくなっているのである。

ここに述べた二つの根拠は、いずれも決定的なものとはいえない。63'の歌と「晩秋」の4の歌との類似なども気にはなる。しかし、どうしても疑問は残るのである。

現段階では、「晩秋」十二首は、代作かもしれないという意味で、「参考」作品としておくべきであろう。

四、おわりに

犀星は、大正期にはごくわずかだが、昭和期に入ると断続的に百首ほどの短歌を発表している。その内の多くが、単行本・全集などに収録されているが、そうでない作品もある。これらも、正確に記録しなければ、とまっている。また、初出と再出との関係も整理しなければ

ならない、とまっている。

注1 明治四十一年四月五日の「北陸新聞」に、「青年歌人を評す（統）」と題した、「ふみ」という筆者による次のような文章がある。

室生犀星 この方の最も得意なのは俳句でせう。初めこの方の歌も俳趣を及びて居て、余り面白くありませんでしたが、近來非常に進歩しました。そして又新体詩もお作りになります。中々の才人です。去る二十九日に発表の「われを見る」君といふ「女ならば」あゝ想ふ」などは中々よかったです。

注2 藤田福夫氏は、昭和四十年八月号の「短歌」に、「室生犀星・尾山篤二郎の初期短歌」という題で、犀星の初期作品三十一首を紹介している。また、室生朝子氏は、昭和四十六年九月号の「短歌」に、「犀星の若き日の歌」という題で、犀星の明治期および大正十四年の作品をあわせて八十五首（「晩秋」十二首のうちの九首を含む）を紹介している。